

心療内科で扱う病態は、救急疾患とは違い、徐々に改善していく経過をたどることが多いので、月に一度お会いし、月単位の経過を確認しながら一緒に病態に対処していく。

継続的に焦点となる心理的な問題の相談を繰り返す。

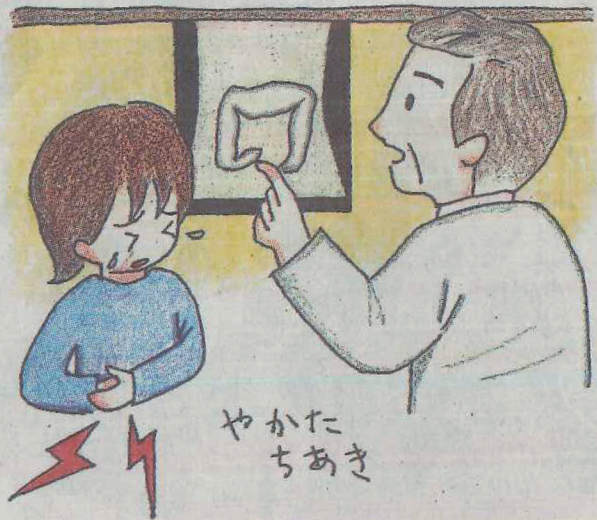
# 診察終了間際に腹痛で来院

返していくので、風邪などにより体調が悪いときの身体の相談は目的外と考え、予定の来診を見合わせる方も少なくない。

自分の母親と思春期の息子さんとの狭間で、更年期に出現するような不調の繰り返しが続く相談に来られる女性がいる。

彼女は40歳すぎの働き者で、3年来通院されている。

今日は来院が遅れている。いつもは決まって予約時間より早い9時前に見えるが、今日はまだ診察記録がされていない。診察も終わりに近づいたころ、やっと来院された。



早い時間の診察が習慣なのに、いつもと違う。継続して扱っている相談と違う相談かもしれないと思いつつ、お呼びした。顔色が良くない。彼女は長く介護の仕事をしていて、病気の症状についてのツボは知っている。「今朝から右の下腹部が痛く、熱も出てきていて、心療内科の診察には行かないつもりだった。盲腸炎のように思つた。確かな病歴も教えてくれた。症状が徐々に進行しているようだ。」

いつもと違う訴えを常ならざるを考え、午後からの予定をキャンセル

だ。彼女の見立て通り急性虫垂炎の疑いで消化器科に依頼した。彼女はそのまま入院となり、腹部CT等のより精密な検査が行われた。翌日、大腸憩室炎と診断がつき、手術はせず、保存的治療となり5日後退院となった。

振り返り、いつも違う腹痛を相談に来ていただいて本当に良かったと思った。心療内科に受診されている方には、不安や緊張を緩和する薬をお飲みいただきたいことが多い。痛みは病気の発症を発見する大事なサインであるが、心配を緩和する薬も脳に作動している。病気のサインとしての痛みの症状も緩和してしまつておき、症状を自覚しにくい場合がある。いつもと違う症状には人一倍注意していくことが大切だと改めて思った。

(三愛病院心療内科医師 東邦大学医学部教授)